

～森 澄雄 『既刊句集一～十七巻他』 より

(1) ふぐり垂るるは寂しからずや雪嶺の間

第一句集 「雪櫟」

(2) 瓜畑に水氣失せたる生身魂

第六句集 「空櫟」

(3) 鉄砲の名にめでたきは水鉄砲

第十七句集 「虚心」

うぐいすの声をまんまるに出るとは言い得て妙。

およそ滑稽の対極に立つ大家の御作六千句より選出。  
一般俳人には一句集から必ず十句もの滑稽句が散見されるが、  
殊、大人の作品群に滑稽は皆無である。

- (1) 昭和二十九年刊行の【雪櫟】から引く。  
「妻子吻合」の謳と述べる二十七歳時の作品である。
- (2) 【空櫟からろ】 昭和五十八年刊行より。  
「湊の遊女が男を待つはかない眩き」と述懐する。  
作者三十二歳の吟。
- (3) 【虚心】 平成十六年刊行。五〇六句  
「常臥し」の言葉が頻繁に盛られ、切ない迄の「妻恋」と  
愛孫との無心なふれあいに目頭が熱くなる。

澄雄と言えば 【淡海】 。集中淡海十五連作は圧巻である。

## 私が見つけた滑稽句

車椅子生活ながら矍鑠として卒寿へ歩く巨人渾身の句集。

さて、揚げて見たものの此の三作品について滑稽を論じるに、小生の瓢筆頭では言葉が浮かばない。

実に奥行きが深い芸術作品であり、改めて大作家の重さに脱帽。

無責任の謗りを受けようが、広く滑稽俳句を愛する諸兄諸姉の慧眼に委ねさせて頂く。